

教育の世界にも……フィンランドで

●学校助手とベンツのお迎えと

一八四〇グラムの未熟児で生まれたトミオ君。彼は四歳になっても歩きませんでした。早産が原因の、脳性まひだったので。

ひとりではベッドから起きられません。そのトミオ君が「ふつう」の小学校に通っています。クラスメイトはごく自然に彼の車いすを押し、ごく自然に彼とたわむれます。クラスの子どもたちは、彼とつきあうことで、ハンディキャップをもった人とのつきあい方を、いつのまにか身につけたようです。

トミオ君は、フィンランド人を父に日本人を母に、十年前ヘルシンキで生まれました。

「日本で育てなくてよかった」と母の真知子・山田・アルホさんは言います。

日本だったら、親がすべてを投げうって、子どもの手足となったとしても、これだけの経験を積ませることとはとうていできないでしょう。

*

一九八八年秋のある日。彼と行動をともしてみました。



学校助手のほかにリフト車のお迎えが毎朝やってきます

ハンディをもつ人とのつきあい方を自然に身につけていきます

朝。「コール・アプスタヤ」(学校助手)のバルブ・コルベラさん(22)が、やってきます。続いて、リフト付きタクシーが二人を迎えにきます。ベンツの大型タクシーから運転手に降ろしてもらおうトミオを、クラスメイトは、「まるで映画スターみたい」と憧れを込めて言うのです。車の迎えも学校助手も、どちらも義務教育法に基づきサービスで、無料です。彼の席は、教室の最前列。車いす用の机と電動タイプが、彼のために用意されました。彼ひとりのためにしつらえたスロープ。外出用、家庭用、学校用、三台の車いす。これらも、義務教育法で地方自治体から貸し付けられたものです。つい最近、車いすのまま階段を上り下りできる装置がこのメイハラテ小学校に貸し出されました。日本円に換算すると八四万円のものです。

コルベラさんは、トミオの手足のハンディを補います。学校ではトイレの世話など。家では両親が帰宅するまでの付き添いもします。

大学受験浪人や進路を決めかねている若者たちが、この仕事を志願します。高給ではないけれど、手のすいているときは、教室の後ろで本を読めます。福祉や教育の道を志す人には貴重な体験にもなります。進学や就職の評価にも加えられます。

*

デンマークに生まれ、スウェーデンで育った「ノーマリセーリング」の



夫妻そろって市議会議員です。盲目の妻は建築家。ちょうど市議選の真っ最中、隣室では作戦会議が

思想は、フィンランドにも渡り、「ノルマリサーティオ」と名を変えて、教育の世界にも根を下ろしてしました。

この思想に基づいた新しい法律、「障害をもつ人のためのサービスと支援法」が、八八年一月、実施されました。

ケア付き住宅、エレベーター、自動ドア。ドアの幅を広げたり、トイレや蛇口を改造したりする工事。介助付き交通サービス、リハビリテーション、耳の不自由な人のための文字電話と通訳サービス。これらが地方自治体に義務づけられました。もしも、自治体がその義務を怠れば国庫補助打ち切りとなります。

●盲目の市議は建築許可委員会の委員

この法律の制定には、「盲目」と「車いす」の夫妻が目覚ましい活躍をしたのだ、と聞きました。夫妻の自宅を訪ねてみました。

暖かな人柄が体からあふれ出ているような、妻のマイヤ・キヨンキヨラさん。彼女は、ヘルシンキ工科大学で建築学を学んでいたとき、視力を失いました。人の顔の見分けもつきません。絶望の中で、「だれもしたくない仕事をしよう」と思い定めました。二九歳で建築士の資格を獲得しました。

夫のカツレ・キヨンキヨラさん。童顔をあごひげて隠した闘士です。筋ジストロフィーで、十歳のときから歩けなくなり、二〇歳のときから呼吸補助器が必要な身になりました。八二年に国会議員に当選。八四年市議にも当選（この国では国会議員と市議会議員を兼務できます）。八六年国会議員は落選。八八年市議に再選。私が出たとき、マイヤさん四二歳、カツレさん三八歳でした。

「新しい法律では、障害をもつ人自身が、ヘルパーの給与を自治体から受け取って直接支払います。つま

り、障害をもつ人が雇用者になるわけです。ヘルパーを選べる利点と同時に、我々にも義務と責任が生まれることになりました」

そういうカツレさんの場合も、呼吸が止まりそうになるとすぐ飛んでくるヘルパーが、二四時間体制で雇われて待機していました。

マイヤさんは、八四年市議に上位当選して、建築許可委員会のメンバーになりました。

「私、かなり怖がられています。ハンディキャップを負った人々への配慮が欠けた建物の建築申請は決して許しませんから。はじめは女性議員、そして次第に男性議員たちも、党派を超えて賛成してくれるようになりました」

オペラハウスも図書館も、障害をもつ人々が利用しやすいものに生まれ変わりました。図書館から本などを届けてもらえるようにもなりました。

*

二人は、毎年、マイヤさんの母校での特別講義に招かれます。

「講義そのものは、一人一時間ずつです。でも、その前に、もつと大切な行事があるので。カツレを学生たちが車いすごと抱えて階段を登り、狭いドアを通り抜けます。高名な先輩の建築家が設計した建物が、実は、障害をもつ人をもつように拒否しているか、それが、どんなに残酷なごとか。若者たちは汗の中で心に刻んでくれているようです」